

## この企画に寄せて

岩崎 稔

つぎの岩田重則氏の論文とそれに対する安丸良夫氏の応答を掲載するにいたった事情について、すこし説明しておくことが、その理解に便利であろう。

2010年9月25日に東京外国語大学海外事情研究所において、科学研究費基盤（A）「近代世界の自画像形成に作用する《集合的記憶》の学際的研究」のプロジェクトと、WINC（Workshop in Critical Theories）の合同企画として、『安丸良夫さんと読む安丸民衆思想史』という研究会を開催した。これは、安丸良夫、磯前順一編『安丸思想史への対論—文明化・民衆・両義性』（ぺりかん社、2010年）が公刊されたことを機縁とし、これをめぐるレビューという形で行なわれた共同討議であった。提題者は、学芸大学教授で民俗学者である岩田重則氏、日本女子大学教授の歴史家成田龍一氏、それに本学教授で哲学者の岩崎稔氏である。この会の参加者は40名を越え、その議論はたいへん活気に満ちたものであった。とくに若い研究者からは、あらためて安丸良夫という歴史家の仕事の全体を再検討し、それを諸学に橋

渡ししたり、各人の歴史意識のなかに着床させたりしていくための重要な機会になったという評価が寄せられた。この日の報告や議論に基づいて、とくに岩田重則氏が独立の論文を寄稿してくださったため、それに安丸良夫氏による当日のリプライを合わせて、本誌に収録することとした。

なお、この研究会の直前に公刊された『思想』2010年8月号の特集「ヘイドン・ホワイトの問題と歴史学」のための安丸良夫氏、小田中直樹氏、岩崎稔氏による鼎談や、そのあとに出た安丸良夫、喜安朗編『戦後知の可能性——歴史・宗教・民衆』（山川出版社、2011年）なども、安丸民衆史の知的な可能性やそのインパクトを集中的に考え直してみようとする試みである。本誌に掲載した二つのテキストは、これらの一連の作業と知的に響き合っているものとして読んでいただけることを希望している。

（いわさき みのる・東京外国語大学大学院総合国際学研究院）